

Prologue

Trust You're Truth

「護りたいんだ——君を」

傷ついた高町なのはの体を抱き、己の無力さを噛み締めながら力なくフェイト・テスタロッサは呟いた。

魔導士にとって最大の相棒——自らの一部とも言うべきインテリジェント・デバイス、バルディッシュと共に折れ砕かれたプライドを噛み締めながら、強くなりたい、自分の為にでなく誰かの為にこれほど強く思ったのは、フェイトにとってこの夜が初めての事であった。

「そう言えば、なのはのお兄さんって——」

「にや？」

フェイトがそう切り出したのは、ギル・グレアム顧問官との面会の帰り、取り敢えずの退院許可が下りて海鳴の自宅に帰るなのはを見送るため、時空管理局本庁舎内に幾つかある転送室^{トランスポート}へと向かう道すがらの事だった。

「なのはのお兄さんって、確か剣を使ってたよね」

親友の意外な質問に、咄嗟に言葉に詰まったなのはだったが、フェイトの目が興味本位の問いかけではなく、

真剣そのものの熱を帯びた、彼女にとって何か非常に重要な問いであることに気づいて、ほんの一瞬の躊躇の後、「うん、やってるよ」と答え、それからフェイトが言外に聞こうとしていであろう話をぼつぼつと語り始めた。「おにーちゃんが使うのは『御神流小太刀二刀術』と言って、普通の刀……あ、刀って解るかな？」

「うん。リンディ提督の執務室で見たことがあるから……模造刀だけ」

フェイトの返答になんだそりや、と思わず脱力しかかったなのはだったが、脳裏にいろいろと間違った日本趣味を持つ警備艦艦長の姿を思い浮かべて、ああそう言えばあの人はああ言う人だ、と力なく溜め息をついて脳裏からその姿を追い払うと言葉を続けた。

「小太刀、っていうのは普通の刀よりもずっと短くて、片手で振り回してつかう刀の事なんだけど、これを両手に持って戦う剣術の事なの」

「うん」

「おにーちゃんはその剣をおにーちゃんが私くらい頃からおとーさんから教わってて、その頃はまだ翠屋のマ

スターじゃなくてボディーガードのお仕事をしていたおとーさんがイギリスで大怪我をして、おとーさんが剣を捨てなくなった後はおにーちゃんが後を継いで御神流の師範……あ、師範っていうのは一番偉い先生の事なんだけど、その師範になったの。それで、今は美由希おねーちゃんを弟子にしておねーちゃんを指導してるんだ」

時折脱線しがちになるなののは言葉を、一言づつ噛み締めるように記憶しながら聞き続けていたフェイトだったが、話をもっとも重要な部分に近づいた事を確信して、より真剣な熱っぽい視線をなのはに注ぎながら、す、つとなのはに顔を寄せて一気に核心に迫った。

「強い……………の？」

「にや？」

「なのはのお兄さん……………その……………剣士として……………」

ああ、と、薄々感付いていた予感的中した、いや、してしまった事になのは一抹の不安を覚えた。どうしよう……………適当に逸らかすべきか、それとも……………だが、結局のところなのはここで親友に嘘をついたり適当に話を逸らかせるような人間では無かった。フェイトが何

を考えているにせよ、恐らくフェイトは真剣そのもので、そしてフェイトをそこまでさせる原因の一端は自分にある、その事を自覚しているだけになのはフェイトから視線を逸らしながらも率直に話を続けざるをえなかった。

「強い……………よ、とつても……………多分……………だけど」

「多分？」

「うん、実際に見た事はないし、おにーちゃんはまだあまりそういう話をするのが好き、じゃないから……………でも」

「でも？」

「忍さん……………つて解るよね。すずかちゃんのおねーさん。その忍さんが以前、ノエルさんと一緒に命を狙われた時に二人を守り抜いたのがおにーちゃんだし、その時おにーちゃんが戦った相手が……………」

話すほどに、どんどん深みにはまっていく事を自覚しながらもフェイトの視線に囚われて、語らざるを得ないいや、語らずにいられないなのはフェイトに促されるままに兄の恋人である月村忍から聞き及んだ、暴走した自動人形「イレイン」と恭也の壮絶極まりない死闘について語り、更に高町家の三兄妹にとつて、もう一人の姉

え、過酷で、しかも長期に渡った「時の庭園」事件に從事した事でその船腹には乗組員同様夥しいダメージが刻み込まれており、今度こそ、絶対に休養が必要と誰もが判断せざるを得ない時期が来ていたのだ。

また、警備本部としてはこの機会を利用してアースラに対しF R A M、艦隊能力回復及び近代化工事の実施を行なう意向を固めてもいた。

F R A Mとは新造時に搭載され、年月の経過によって陳腐化したシステムを一新し、また現代のミッションに対応可能なように新しいシステムを追加する改装工事の事で、これによって特に予算面の問題から次期主力艦^Cの建造目処が立っていない管理局の中核戦力として、当面对L級が活躍の場を失わずにすむのだった。

「港務部より信号。ドック内安全確認。乗組員下艦を許可」

閘門が閉鎖され、ドック内部の与圧が完了して一G環境下に移行し、船体が盤木^{ばんぎ}と呼ばれる作業用の台座の上に完全に落ち着いて安全が確保された事を通知する発光信号を窓外に読み取ると、手近な窓から繫留作業の様子

を観察していた艦長のリンディ・ハラオウン上級執務正にその事を告げて、エイミイ・リミエッタ二級執務官補は小さく伸びをすると自分の座席から離れ、リンディの傍に歩み寄った。

「やれやれ、やっと一息つけたって感じね……本当ならもっと早くにドック入り出来た筈だったんだけど」

「事件の後始末で長いことあの宙域に留まらざるを得ませんでしたからね。でもお陰で年末年始はゆっくり過ごせそうですが」

「そうだといいんだけど……」

繰り延べに繰り延べを重ねた結果とはいえ、年の瀬を控えたこの時期にフネを降りて陸上で過ごすことができそうな事を率直に喜ぶエイミイに対して、リンディは気がかりなことがあるらしくその表情には思案の色が伺われた。

「なのはちちゃん……の事ですか？」

「ええ……」

リンディの表情から、考えられる唯一の事象に辿り着くのにエイミイもそう大して時間を必要としなかった。

「幾ら実戦経験が乏しいとはいへ、AAA級の魔導士が三人に使い魔一人。それがなす術もなく倒されてあまつさえなのはさんはリンカーコアの魔導力を根こそぎ奪われた……世の中、まだまだとんでもない実力者が大勢いる……なんて悠長な事態じゃなさそうな気がして」

「大事件、それも時空遺失物^{ロストオブジェクト}が関与するようなどんでもない事件が起こりつつあるような？」

「ええ……思い過ぎしならいんだけど……」

漠然とした不安が重いしこりとして胸の中に広がって行くのを感じながら、二人はそれっきり口を閉ざし、

「報告書提出のため艦長および先任執務官出頭せられたし」の命令が本部から伝達されるまで、下艦する乗組員と入れ替わりに工事準備のため乗り込んで来た作業員でござった返す甲板上の喧騒を艦橋から見下ろし続けていた。

「そう言えば……」

ランチタイムの喧騒で賑わう学生食堂を避けて、学科講義室で弁当をひろげながら高町恭也は先日から聞こう

と想って忘れていた事を目の前の友人に問いかけた。

「草間の道場、新しい指導員が入ったって聞いたんだが」
喫茶店「翠屋」のオーナーシェフであり母——と、言

っても血の繋がりは無いのだが——でもある高町桃子特製の新作サンドイッチ（評判が良ければ年明けから翠屋の新メニューに名を連ねる予定だ）をばくつきながら恭也がそう言うのと、目の前の友人——赤星勇吾——は「ああ」と一言肯定の印に首肯いた。

「そう言う事は地獄耳だな恭也は。確かに先週から来てるよ」

「ほう」

弱冠二〇歳にして趣味が盆栽に昼寝に太公望、余程の事がなければ必要な事以外は殆ど喋らず、自宅に帰れば畳敷きの部屋に文机とよく言えば枯れきった、悪く言えば爺臭さ丸出しの恭也が目の色を変える話題があるとすればもっぱら剣。そんな恭也の興味を嫌でも引き付ける話題が転がり込んで来たのが一〇日程前の事だった。

はあ、と溜め息をつきながらじろりと赤星をひと睨みして、諦め半分呆れ半分と言う表情でサンドイッチの相

手に戻った月村忍に、片手で伏し拝むような詫びの仕草を示しておいて、自分もランチボックスから新しいサンドイッチをつまみ上げながら赤星は話を続けた。

「そうだなあ……本気で手合わせはまだしたことがないけどなかなかの腕前だな、あれは」

「ふむ」

「今は小学生の道場を見てるんだけど、体の切れとかからすると多分剣道じゃなくて、高町みたいな実戦剣術の方じゃないかと思うんだ」

「あれ？剣道と剣術は全然違うから、剣術の人が剣道の指導に行くとかはないんじゃないか？」

なにか引つかかるものがあつたのだろうか、それまで面白くも無さそうにサンドイッチをつまみながら話を聞いていた忍が口を挟んだ

「ああ、普通はそうだ。ただ、日頃からの継続が全ての世界だからな、確かに剣術と剣道は似て非なるが、腕を鈍らせないために自分の鍛錬とは別に負担にならない程度に指導を行なったりすることはないわけではない」

「ふーん、そんなもんか……」

恭也の説明であっさり納得したのか、それでもこの話題に興味を失ってしまった忍は興味を再びサンドイッチに戻し、恭也と赤星は再び話を再開した。

「ま、それはさておきこの先生、ちよつと変わった人だな」

「ふむ」

「なんでも、父親が日本人の母親がドイツ人、もつとも今まで暮らしたのは英国で、訳あってこっちに引越して来たらしい」

「それは確かに変わってるな……というか、ヨーロッパが長いなら同じ剣でも普通はフェンシングの方に行きそうなものだが……」

当然過ぎる恭也の疑問に、「ここからがこの話の面白いところだ」と合いの手を入れると、赤星は息継ぎがてらに紙パックのカフェオレを一口啜った。

「なんでもな、母方の家系が代々なんとかいう騎士団の系譜で、そういう伝統がなくなった後も剣術一族をやってたんだそうだ」

「ほう」

「で、普通だったらそこで確かにフェンシングか馬術の方に行くのが自然なとこだけど、そこがほら、彼女の父親になったのは日本人、ってわけ。元々の下地があったところに見た事も聞いたこともない異国の剣、と来れば興味を引かれるのも無理はないな」

「ん？ちよつと待って！今、『彼女』って言わなかった？」
そこで唐突に話の腰をへし折って忍が赤星に詰め寄った。

なぜか解らなかつたが、とにかく忍は女性ならではの感の良さで頭の中に危険を知らせるアラートを鳴り響かせていたのだ。

だが、そんな忍の剣幕を何時ものようにさらつと受け流して、赤星は話の残りを片付けた。

「ああ、ちよつと雰囲気が神咲さんのお姉さんに似てるかな、神崎さんのお姉さんの身長を伸ばした感じで、綺麗な赤毛をポニーに結つてな、武家袴をきりつと締めるとこれがなかなか、ハーフとは思えないくらい似合うんだ。ああそうそう、もし手合わせしたいなら言伝くらいしとくぜ。名前は……えくつと、そうそう、シグナム・

八神って言うんだけど……」

何気なく赤星が呟いた名前を、恭也もこの時は心の奥に留めはしたものの取り立ててそれ以上深く考えた事はなかつた。

そして、恭也にとつてのこれが数奇な運命の元に導かれた哀しき物語の始まりであつた。